モンゴルにおけるアイデンティティ研究の現状と課題

—モンゴル版自我同一性尺度の作成を通して—

臨床心理学コース　バットオロシホ・ナフチャー

The Present Condition and Tasks to Develop Identity Study in Mongolia:
In Terms of Development of Mongol Version of Identity Scale

Navchaa BAT-ORSHIKH

The aim of this study is to modify the Rasmussen's Identity Scale to develop the standardized Mongol Version of Identity Scale, which could cover the present situation of Mongol society. Mongol Version of Rasmussen's Identity Scale, Anxiety Trait scale, another Identity Scale, Self-esteem Scale were distributed to 400 Mongol university students. The reliability was tested in terms of the Cronbach's coefficient reliability. The validity was examined by the test of correlation coefficient with the other 3 scales. As a result, the Mongol Version of Rasmussen's Identity Scale was verified as a standardized scale to assess the identity status of Mongol university students.

目　　次

1．研究の位置づけと問題の所在
　1－1　モンゴルにおけるアイデンティティ研究の必要性
　　1－1－1　社会システムの変化
　　1－1－2　高学歴化
　　1－1－3　地域的移動
　1－2　ライフサイクルとアイデンティティ研究
　　1－2－1　アイデンティティ研究の概観
　　1－2－2　アイデンティティ論からみた青年期
　1－3　まとめ
2．本研究の目的
3．モンゴル版自我同一性尺度の作成
　3－1　予備調査
　　3－1－1　Rassmussen の自我同一性尺度の翻訳
　　3－1－2　予備調査
4．本調査
5．研究上の意義と課題

1．本研究の位置づけと問題の所在

1－1　モンゴルにおけるアイデンティティ研究の必要性

Baumeister(1986)は，アイデンティティを規定する要因として，地域的移動，祖先とのつながり，結婚，仕事・職業，社会階層，性別，年齢，身体的特徴，道徳的価値，宗教の諸側面を挙げている。そして社会的階層の移動に対する教育のもつ機能的意義を認めている。

現在，モンゴルでアイデンティティの研究が必要不可欠である。以下にアイデンティティを規定する諸側面の内，モンゴルにおいて一番重要である社会システムの変化(1－1－1)，高学歴化(1－1－2)，地域的移動(1－1－3)に焦点を当てながら，モンゴルにおけるアイデンティティ研究の必要性を述べたい。

1－1－1　社会システムの変化

アイデンティティは，時代や歴史・文化によって大きく規定される側面を持っている。また，青年期は社会構造の変化とともに変遷してきた歴史的経緯がある。

モンゴルは，ソ連(ロシア国)に継ぎ世界で二番目の社会主義を取り入れた国である。それが1924年11月26

日，ボグド・ゲゲンハーン(天皇)の死にともない召集された第一回国会において宣言された。その歴史は，1921年から1989年まで続く。この時期は，農牧業の集団化，宗教弾圧などと極端な偏向政策が取られた時期があったものの，ソ連(ロシア)，東欧諸国との協力関係の元で，1920年代から工業化が進められ，1948年から開始された5ヶ年計画，3ヶ年計画などを経て，1990年までの第8次5ヶ年計画までが実施され，工業・産業部門が育成されることとなった。モンゴルは，ソ連を中心とした社会主義経済圏の中で，ソ連や東欧諸国などとの相互協力に基づく経済路線を歩んだのであった。

1989年に民主化の動きが始まり，その7月に，複数政党制に基づく初の民主的選挙が行われ，与野党連立政権が誕生し，これまでの政治体制が大きく変革された。政治的に社会主義国家から民主主義国家へと移行したことに伴い，経済面でも，それまでの計画経済を放棄し，市場経済に急転換した。モンゴルは1999年5月の時点で，139ヵ国と外交関係を樹立し，交流関係が拡大された。情報の自由化が行われ，世界各国からダイレクトに情報が入ってくるようになって，若者の価値観は多様化しつつある。

宗教も再び復活して，国民の90%が仏教徒と言われていたものが，キリスト教を信仰する者が増え，多様な価値が尊重されるようになった。

市場経済の導入に伴い，民営化が国や個人のレベルで進み，国営工場や産業の民営化，個人財産の私有化が進められた。競争社会や私有財産の促進といった新しい出来事に対応すべく個人にその生き方の変化が求められている。競争が激しくなったため，知識・技能の向上心，資格取得の必要性などをもたらした。その一方，自己中心化や道徳性の希薄化が見受けられる。

現代は，仕事・職業の種類が拡大し，社会的階層は流動的になった。道徳的規範も希薄化し，宗教的価値づけも圧倒的な支配力を失い，個人の内的な力が問われる時代となった。

この社会システムの中では，個人が社会主義時代のように集団や権威の力に依存することができなくなり，自分の生き方を自分の力や自分の選択にまかされることになっている。従って，個人として選択する能力を身につけていないと，アイデンティティの混乱や拡散が引き起こされやすい状況にあると言える。

次の節で，モンゴルの高学歴化について述べたい。高学歴化は，社会システムの変化がもっとも刺激した現象である。モンゴルの青年同盟の調査(2003年，1000名)によると，現代の若者の(16～35才)40%が教育・知識を自分にとって重要な価値観として選んでいることが知られている。

1－1－2　高学歴化

社会主義時代の初期から国民全体への識字率の徹底政策が実施され，その十数年後には，国民の識字率の割合は100%に達した。この時代から国民の教育の権利が確保され，徹底的に義務教育を受けていた。社会主義圏の国々と教育，学術分野において盛んな交流が行われていた。専門職の分野をはじめ，高等教育，学術分野にわたって，専門家の派遣や受け入れが積極的に実施され，技術・学問の交流を深めてきた。ロシアや東欧諸国への留学や受け入れ体制が整備されていた。

社会主義時代には，遊牧民と労働者と知的職業という階層が存在しており，階層間の移動は比較的安定していた時代だった。この時代は，個人は高等教育を受ける権利を持ち，社会階層にかかわらず自分の能力により実現することはできた。しかし，国は高等教育，専門教育，海外留学などの方針を定め，受験者の人数が教育機関ごとに定まっており，計画的な管理をしていた。国による制限などによって個人の道がある程度限られていた。

民主主義国家になった現在は，国による制限はなくなり，教育機関が増加し，以前より社会階層を越えての移動は著しく拡大した。更に，高等教育機関の整備，カリキュラムの改善がますます促進され，国立大学にその質や規模で劣らない私立大学も数多く出現した。モンゴル全国で2000年～2001年に国立・私立も合わせて172の大学が活動していたのが，2002年に178，2003年に185と増えている。その内，私立大学の数は，2000年～2001年に134，2003年に136と圧倒的な割合を占めている。

現在，世界各国との交流を，日本へなど，さらに拡大した。政府は人材育成に積極的に取り組んでいる。現在，海外の教育・研究機関で学術的な活動が盛んに行われている。

社会システムの変化に伴い，教育の内容も変わりつつある。その内容は，市場経済の需要をいち早く反映させる形となっている。市場経済学・経営学，金融財政関係，コンピューター情報関係の新たな枠組みを設置し，人材育成を図っている。

このように，現在は，教育によって社会階層の上層への移動が拡大し，上昇志向が著しく増大した。社会主義に基礎をおく高学歴化は，現在において一般化し，

教育の期間は延長されたといえよう。それに伴い，延長した青年期に心理的混乱が生じやすくなった。

次に，アイデンティティを規定する一つの重要な側面である地域的移動について取り上げたい。

1－1－3　地域的移動

モンゴルは遊牧民の文化があることが知られている。実際に，その国土面積は156万6500平方 km の内，首都ウランバートル市の面積は1358平方 km を占めている。地方は，地理学上，大きく異なる四つの地帯に分かれている。主に，万年雪に覆われた高山を多く有する西部アルタイ山地地帯，河川に恵まれた中央部ハンガイ・ヘンティー山地地帯，平原が連なる東部ドルノド平原地帯，砂漠の広がる南部ゴビ地帯という四つの地帯である。それによって，地方の気候や自然，そして人々の生活の知恵，文化が大いに異なる。

地域間の移動は，モンゴルの場合，定住生活を送ってきた日本と違って，何世紀も前から可能であったのが特徴的かもしれない。それは，生活形態は両国間で異なっているからである。それでも，地域を越えての移動は，国の行政上の制限や地域の自然や気候，人々の風土，習慣が異なるため，容易ではなかった。その意味で，生まれ育った土地から殆ど離れることはなく，生活していたといってよいであろう。

地域的移動は地域を越えて，周辺の都市へ広がり，徐々に首都へと拡大していった。近年，首都ウランバートルや主要都市への人口流入は著しくなっており，地域的移動が急激に拡大しつつある。遊牧生活の様式を止め，近郊の都市への就職，定住，結婚も望む人々が増加している。

以上述べてきたように，社会の政治的・経済的体制が変わり，価値観の多様化，高学歴化の促進，地域的移動の拡大，社会階層間の流動化，職業選択の拡大がもたらされた。その結果，青年には，自分を取り巻く環境に順応し，自分の生き方を選択する能力を身につけることが求められている。しかし，重要な選択を決定しなければならないのと同時に，青年期は，発達段階の中で，自分を確立して，アイデンティティを獲得する時期でもある。このような社会状態の中で，青年は直面する課題は多くなり，困難な状況に陥りやすいと言える。そのため，モンゴルにおいて青年の自我同一性の研究の必要性が問われているのである。

1－2　ライフサイクルとアイデンティティ研究

本研究では，モンゴルの青年の自我同一性の状態を明らかにするために，発達的側面に着目する必要があると考える。以下では，アイデンティティ研究の概観を行った上で，アイデンティティティ論から見た青年期について述べる。

1－2－1　アイデンティティ研究の概観

アイデンティティは，極めて抽象的な概念であり，Erikson(1950)の構成概念である。自我同一性に関する研究の一つの流れは，Marcia(1965, 1966)により考案された，自我同一性ステイタス面接(ego identity status interview)によるものである。この方法を用いた諸研究は，これまでたびたび紹介されている。そのユニークな研究方法は，自我同一性に関する操作的研究を発展させる上で，大きな力となった。この方法による研究を日本で初めて行ったのは，無藤(1979)である。Marcia 法は，その後の研究者によって若干の修正が加えられたり(Shekel & Marcia, 1972; Hodgson & Fisher, 1979など)，この方法を質問紙化して利用しようとする試み(Simmons, 1970; Adams, Shear, & Fitch, 1979; 福富，1981など)も行われており，現在，自我同一性に関する主要な流れの1つを形成している。

もう1つの大きな自我同一性研究の流れは，自我同一性を尺度(質問紙)によってとらえようとするものである。藤井(1980)によれば，第1に，発達的側面に着目したもの，第2に，「同一性の感覚」の観点に着目したもの，第3に，実存的側面に着目したものである。

第1に，発達的側面に着目した研究としては，Erikson の個体発達分化図式の定義に基づいての質問紙がある。エリクソンは「人間の八つの発達段階」として，人間生涯を展望した心理社会的発達の図式を示した。Erikson によれば，「自我同一性」は，個体発達分化の原理のもとに，乳幼児期から様々の体験が再統合されていく過程で形成されるものである。特に，青年期以前の各段階の発達的危機をうまく解決し得たところに結実する発達的な達成物といえる。「自我同一性」の理論的構成概念として取り扱った代表的な研究として，まず Rasmussen(1961, 1964)があげられる。Rasmussen とほぼ同様の視点から作成された質問紙は，Constantinopole(1969)，Boyd & Koskela(1970)，McClain(1975)らのものがある。

次に，「同一性の感覚」の観点について述べる。Erikson は「自我同一性」の概念の現象学的な主観的意識体験を重視している。同一性の感覚とは，自己の生

活史的連続性，や自己の斉一的なまとまりなどを基盤とする自己確信であり，そうした自己が他者によっても認められ，自分と他者の双方の認知が一致しているという心理的安定感を指している。その観点に基づく代表的な研究としては，例えば，Dina(1963, 1965)，Baker(1971)，Tan et al.(1977)，古沢(1968)，砂田(1978)である。

第3に，実存的側面に着目したものについて述べる。「自我同一性」の概念には，「意味世界」を求め，その中に自己を確立するという側面が含まれる。この点に注目する時，職業，趣味，結婚，イデオロギーなどの「基本的な人生への関与」の諸側面は「同一性」形成の一つの重要な指標になると考えられている。代表的な研究として，Simmons(1970)，Adams et al. (1979)のものがある。

1－2－2 アイデンティティ論からみた青年期

アイデンティティは，個人のあり方を包括的・全人格的に捉える概念であるため，ライフサイクル全体にわたる発達過程やその特質を解明することに適している(岡本，1994)と言われる。

Erikson によれば，「自我同一性」は，個体発達分化の原理のもとに，乳児期からさまざまな体験が再統合されていく過程で形成されるものである。

Erikson は，アイデンティティの危機を心理社会的発達の第Ⅴ期，つまり，思春期から青年期の移行過程における発達的危機の問題としてとらえている。自我同一性の問題がもっとも危機にさらされ，問い直しを必要とされる時期は青年期である。

特に，アイデンティティの基本的要素は乳幼児期から発達過程を適切に達成されていくことにより，青年期のアイデンティティの確立はなされる。アイデンティティの感覚は，青年期における「自分とは何か」という自己への問いとそれに続く心理的葛藤を通して獲得されるものとされる。その点で，アイデンティティの確立には，アイデンティティの危機が前提となる。

心理社会的危機とは，人がそのライフサイクルの中で，次のプロセスに進むか，それまで経てきた発達の過程に逆戻りしたりするか，横道に外れて進むことなどに関わる。多くの学者が危機を否定的なものとして捉えたのに対し，Erikson においては発達のための決定的な契機として，むしろなくてはならないものであり，それまでの心的体性を発達の時期にあわせて再体制化し，統合する心の働きとして生涯にわたって繰り返されていくものであると捉えられている。

青年期以前の発達課題が適切に達成されていなければ，青年期のアイデンティティの確立はそれだけ困難となる。このように青年期は，乳児期以来の発達の達成度が試されるとともに，青年期以後の中年期，老年期にいたる発達の基礎を提供する，ライフサイクルの中でももっとも重要な発達段階である。(表1－1，アイデンティティの発達図式の中での青年期の位置づけ)

1－3 まとめ

モンゴルは，社会システムの変化によって，個人への様々な肯定的・否定的な要因がもたらされた。現在は，地域的制約はなくなり，仕事・職業の選択は増大し，社会的階層は流動的になり，唯一の宗教の存在による圧倒的な支配力が失われている。個人が集団や権威の力に依存することができなくなり，自分の生き方を自分の力や選択にまかされる時代になった。従って，個人として選択する能力を身につけていないと，アイデンティティの混乱や拡散が引き起こされやすい状況にある。

また，教育機関が増加し，学習の時間が長期化した。教育機関がアイデンティティ形成の主要な場として，長い期間を社会が提供すると共に，保証しているものになった。Erikson はこれをモラトリアムといっている。こうした状態は，ある場合には，行き過ぎて病的な状態につながることもある。

このように，青年を取り巻く環境が大きく変わってきており，青年がライフサイクルの発達課題を解決していくのは一層困難になっている。時間的展望の拡散，将来への希望の喪失，無力をもたらしているかもしれない。従って，青年期の発達課題との関連で青年を理解することは援助の際，重要である。

そこで，本研究では，青年期の発達的側面に着目し，そのような研究の中で，「自我同一性」を理論的構成概念として取り扱った代表的な研究として，欧米諸国で最も良く利用されている，Rasmussen の尺度を用いることとする。宮下・平野(1981)，宮下(1987)は，Rasmussen の自我同一性の日本語版を作成し，信頼性と妥当性を検討した。Rasmussen の尺度は，1980年代に入って，Woods & White(1981)や Wilkerson, Protinsky, Maxwell, & Lentner(1982)など頻繁に用いられ，自我同一性研究を進める上での1つの重要な尺度であるといえよう。

表１－１　アイデンティティの発達図式の中での青年期の位置づけ

老年期	Ⅷ								統合 対 絶望
成年期	Ⅶ							世代性 対 沈滞	
前成年期	Ⅵ					連帯 対 社会的孤立	親密 対 孤立		
青年期	Ⅴ	時間展望 対 時間拡散	自己確信 対 アイデンティティ意識	役割実験 対 否定的アイデンティティ	達成の期待 対 労働麻痺	アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散	性的アイデンティティ 対 両性的拡散	指導性の分極化 対 権威の拡散	イデオロギーの分極化 対 理想の拡散
学童期	Ⅳ				勤勉性 対 劣等感	労働同一化 対 アイデンティティ喪失			
幼児期後期	Ⅲ			自主性 対 罪悪感		遊同一化 対 空想アイデンティティ			
幼児期初期	Ⅱ		自律性 対 恥、疑惑			両極性 対 自閉			
乳児期	Ⅰ	基本的信頼 対 基本的不信				一極性 対 早熟な自己分化			

２．本研究の目的

本研究では，自我同一性を「心理・社会的発達段階，すなわち乳児期から成人前期に至る発達段階について，それぞれの発達的危機を解決している程度」と定義する。

そこで，本研究の第一の目的として，発達的側面に着目した，信頼性と妥当性の高い自我同一性尺度を作成することがあげられる。その際に，欧米諸国で最もよく用いられている，発達的側面に着目した，内容的妥当性の高い RasmussenJ. E(1964)の尺度をモンゴル語に翻訳し，用いることにする。

３．モンゴル版自我同一性尺度の作成

３－１　予備調査

３－１－１　Rasmussen の自我同一性尺度の翻訳

発達的側面に着目し，Erikson の発達理論に基づいて，アイデンティティを判定する尺度として，欧米諸国で最も利用されることの多い Rasmussen の自我同一性尺度を翻訳し，モンゴル語の翻訳の妥当性を吟味することを目的とした。2004年７月～８月にかけて，尺度の翻訳・内容的妥当性の吟味を行なった。尺度の日本語訳(宮下・平野，1981；宮下，1987)の72項目をモンゴル語に訳し，教育心理学専攻の日本語が堪能なモンゴル人の留学生に訳の適正を依頼した。そして，学生相談所の職員１名と共に英訳及び内容的妥当性の検討を行った。

３－１－２　予備調査

目的

モンゴル語訳による Rasmussen の自我同一性の尺度(以下，REIS)を用いて，予備調査をし，項目の検討を行うことを目的とする。

対象者

対象者は，モンゴルの国立Ｔ大学の２，３年生の250名である。 性別に関して30，専門に関して77，年齢に関して39の欠損値があった。

		度数（パーセント）
性別	男	84（45.90）
	女	99（54.10）
出身地	都市（UB）	79（37.09）
	地方	134（62.91）
年齢	17歳	20（11.49）
	18歳	57（32.76）
	19歳	41（23.56）
	20歳	24（13.79）
	21歳	11（6.32）
	22歳	5（2.87）
専門	理科	112（82.35）
	文化	24（17.65）

手続き

REIS の質問紙を実施する際に，授業が終了した後で集団的に，または個別に実施した。100部は，T 大学の学生寮 4 校舎に訪ねて，個別・集団的に調査に協力してもらった。調査時期は，2004年 9 月である。

質問紙の教示は，質問紙の用紙に印刷した。結果の処理は，REIS は，各項目とも同一性確立の程度の高いほど高い得点となるように，7～1 点を付与し，得点化を行った。

質問紙の構成と内容

REIS はモンゴル語の翻訳による72項目から成る。Erikson の発達図式の最初の 6 段階，すなわち第Ⅰ段階：基本的信頼対不信，第Ⅱ段階：自律性対恥，疑惑，第Ⅲ段階：自主性対罪悪感，第Ⅳ段階：勤勉性対劣等感，第Ⅴ段階：自我同一性対自我同一性拡散，第Ⅵ段階：親密性対孤立の六つの発達段階に各々12項目が配置されている。また，第Ⅰ～Ⅵまでの発達段階に各々 3 つのサブカテゴリーを設定した。サブカテゴリーの項目選択は，内容的妥当性を主に行っている。

サブカテゴリーとして：

Ⅰ信頼感対不信感：①時間的展望　②他者への信頼感　③好機の喪失感

Ⅱ自律性対恥，疑惑：①自己確信　②自律感　③恥に対する恐れ

Ⅲ自主性対劣等感：①家族や自己の育ちに対する嫌悪　②集団での実験役割　③自主性

Ⅳ勤勉性対劣等感：①達成への努力　②競争への過剰意識　③仕事(課題)に対する集中力

Ⅴ同一性対同一性拡散：①心理・社会的健全さ　②自己概念と他者認識の一致　③計画性・目的性及び自己の進む方向の了解

Ⅵ親密性対孤立：①親密な対人関係　②なじまない人や信念の拒絶　③対人関係における情緒的孤立

各発達段階の危機がどの程度解決されているか，すなわち同一性確立の程度は，各段階のサブカテゴリーの得点によって表される。

結果・考察

調査は250部を実施し，有効回答数218部に対して分析を行った。この218名のデータについて，REIS の各項目の得点とその項目を除いた時の，下位尺度の全体得点とのピアソンの偏差積率相関係数を算出し，項目分析を行った。その結果，第Ⅰ段階に 3 項目，第Ⅱ段階に 4 項目，第Ⅲ段階に 3 項目，第Ⅳ段階に 1 項目，第Ⅴ段階に 4 項目，第Ⅵ段階に 1 項目が，各下位段階との全体得点と負の相関を示した。負の相関のある項目の結果を表 3 － 2 に示す。

この結果に基づき，負の相関のある17項目と有意水準に達していない 1 項目を除外し，54項目を採択した。REIS 全体得点の平均は179.93で，標準偏差は24.03であった。（表 3 － 3）。

下位尺度・全体得点との相関係数は，第Ⅰは.53，第Ⅱは.61，第Ⅲは.74，第Ⅳは.82，第Ⅴは.73，第Ⅵは.40で，いずれも 1 %水準で有意である。（表 3 － 4）

信頼性の検討には，Cronbach の α 係数による信頼性係数の方法を用いた。尺度全体の α 係数は0.81であり，下位尺度毎の信頼性係数は，第Ⅰは0.35，第Ⅱは0.53，第Ⅲは0.50，第Ⅳは0.53，第Ⅴは0.56，第Ⅵは0.35である。（表 3 － 5）

上記の結果からみれば，第Ⅰと第Ⅵの発達段階，すなわち信頼性対不信感，親密性対孤立において，下位尺度の全体得点との相関係数は他の第Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴに比べて比較的低く，Cronbach の信頼性係数も，同様な二つの尺度において比較的低い値になった。その理由として，項目分析をする際に，まず負の相関のある項目のみを優先して分析対象にしたことによる。また，本調査を行う際に，サブカテゴリーの項目数が少ないということを考慮し，有意水準に達していない幾つの項目を除外せずに，もう一度，内的整合性の検討をしてみたいという意図によることも考えられる。

表３－２　REIS の下位尺度の項目と下位尺度全体得点との Pearson 相関係数

下位尺度	項目の内容（逆転項目は●）	相関（下位尺度別）
I	・●将来の目的や欲しいものを手に入れるために、現在の楽しみを諦めるとしたら、悔いが残るであろう。	-0.14797
	・●私は、現在自分が歩んでいる道にかなり満足している。	-0.16557
	・●気をつけていないと、人は私の弱みに付け込もうとするだろう。	-0.05976
II	・友達の前で失敗しても、別にくよくよしない。	-0.09475
	・●何かした後で、それが正しかったかどうか、心配になることが多い。	-0.03431
	・●両親が、あなたのなすことやることすべてを承認してくれることが、あなたにとってはとても大事なことである。	-0.04883
	・●私は、何か重大な決断をしなくてはならないときには、いつでも家族から援助や助言を受ける。	-0.18699
	・●人に、とやかく言われるぐらいなら、人前では口をつぐんでいる方がよい。	-0.27754
III	・●隠しておけるなら、家族や自分の育ちについて他人に喋り過ぎないのが最善である。	-0.13318
	・１０代の時期に、クラブなどの集団活動に参加することのなかった人は、損をしてきている。	-0.07810
	・●私はいつもあくせくとして忙しいが、ともすれば空回りばかりして、うまく前へ進んでいないように思える。	-0.04556
IV	・●いつも、人と競い合わなければならないような仕事をしていると落ち着かず幸せになれないだろう。	-0.05142
V	・今と違う顔つき、体つきであって欲しいとはめったに思わない。	-0.02630
	・人生をうまく成し遂げていく上で、私の容姿や行動が妨げとなっているとは思わない。	-0.03853
	・私は、本当に欲しい物を我慢して待つことができない。	-0.17993
	・私は生涯の仕事として何をしたいかははっきり決めていないが、とりあえずここ２，３年の計画や目標については、ある程度はっきりしている。	-0.00751
VI	・●なごやかに、気楽にやっていくためには、他人とうまくやっていかねばならないが、それ以上親密になる必要もない。	-0.04542
	・人は他人と親しくなりすぎない方が幸せであろう。	0.07408

表３－３　REIS(54項目)の下位尺度及び全体得点の平均と標準偏差(N=218)

変数	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
I(9)	196	25.21	5.71	12	40
II(6)	199	20.96	5.69	8	35
III(9)	197	28.55	6.13	11	42
IV(11)	185	42.50	8.17	27	62
V(8)	180	35.62	6.67	19	49
VI(10)	195	25.83	5.40	11	41
REIS 全体	137	179.93	24.03	131	240

表３－４　下位尺度・全体得点間の相関係数

(N=218) ***<.0001

	I	II	III	IV	V	VI
REIS の全体	0.53***	0.61***	0.74 ***	0.82***	0.73***	0.40***

表３－５　REIS の Cronbach α係数による信頼性係数 (N=218)

下位尺度	I(9)	II(7)	III(9)	IV(11)	V(8)	VI(10)	全体(54)
α係数	0.35	0.53	0.50	0.53	0.56	0.35	0.81

ここで，17の項目が負の相関があり，その内11が逆転項目である。それには，翻訳上の問題があろう。また調査に協力してくれた集団に黙従傾向が見られたか

もしれない。またモンゴル人の考え方，文化という要因が働いているかもしれない。また，人によって，二通りの解釈のできる項目が含まれていることも考えられる。

以上の結果を踏まえて，項目を修正し，尺度をより洗練させることが次の課題である。

4．本調査

目的

予備調査の分析を経て，尺度の内的整合性を高め，信頼性と妥当性の高い尺度を作成することを目的とする。

対象者

モンゴル国立T大学，M大学，S大学の2，3年生の400名を対象にした。欠損値の度数は3である。

		度数（パーセント）
性別	男	172（49.86）
	女	173（50.14）
出身地	都市（UB）	168（48.70）
	地方	177（51.30）
年齢	17歳	15（4.39）
	18歳	69（20.18）
	19歳	125（36.55）
	20歳	82（23.98）
	21歳	35（10.23）
	22歳	9（2.63）
	25歳	3（0.88）
学年	1年生	9（2.61）
	2年生	188（54.49）
	3年生	110（31.88）
	4年生	38（11.01）
専攻	理科	333（96.52）
	文科	12（3.48）

手続き

質問紙：

(1) REIS（本研究の訳による54項目；7段階評定。）

(2) 特性不安尺度STAI（清水・今栄，1981年の訳による20項目；4段階評定。STAIは自律神経の興奮などを伴う一時的，状況的な不安状態を示す状態不安を測定する尺度と，ストレス状況に対して状態不安を喚起させやすい傾向であり，比較的安定した個人内特性ととらえられる特性不安を測定する尺度の2つからなる。本研究では，特性不安尺度（A-Trait）を利用した。）

(3) アイデンティティ尺度（下山，1992による20項目；4段階評定。アイデンティティ形成の基礎となる自己の安定が得られず，不安や孤独におそわれる気持ちを反映した内容となっている「アイデンティティ基礎」尺度と，自己の主体性や自己への信頼が形成されていることを表す項目からなる「アイデンティティの確立」尺度からなる。）

(4) 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982年の訳による10項目；5段階評定。（ローゼンバーグ（1961）は，他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく，自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考えている。

上記の尺度を冊子として，友人の協力を得て10月に実施した。授業時間を利用して，集団的に行ったのと，個別に協力を依頼し実施した。

REISは，各項目とも同一性確立の程度の高いほど高得点となるように，7～1点を付与した。その他の三つの尺度に関しては，いずれも所定の様式に従って得点化を行った。すなわち，A-Trait尺度では，不安の高いほうから順に4～1点を，アイデンティティ尺度では，アイデンティティの確立の程度の高い方から4～1点を，また自尊感情尺度については，自尊心を方向付ける程度の高いほうから5～1点を与え，得点化を行った。

結果・考察

質問紙調査は400部実施したが，有効回答数348部を分析対象とした。

項目分析

348名のデータについて，REISの下位尺度の各項目の得点と全体得点との，ピアソンの偏差積率相関係数を算出し，項目分析を行った。その結果を表4－1に示した。これによると，第Ⅰ段階2項目，第Ⅱ段階1項目，第Ⅳ段階1項目，第Ⅵ段階2項目，合わせて6項目が，有意水準に達しておらず，これらを除く48項目を以下の分析の対象とした。

REISの分布は歪度は.55，及び尖度は.56で，その絶対値は，1を越えてないため，正規分布である。REISの全体得点の平均値は239.19で，標準偏差は27.81である。（表4－2）

次に，REISの下位尺度・全体の相関係数を算出した。REISの全体得点と下位尺度の相関は，第Ⅰは.76，第Ⅱは.59，第Ⅲは.80，第Ⅳは.80，第Ⅴは.78，第Ⅵは.71である。（表4－3）上記の結果に基づいて，モンゴル語訳によるREISの内的整合性は十分高いことが確認できた。次に信頼性を検討した。

表4－1　下位尺度の項目と下位尺度の全体得点との相関係数（N＝（348）

***<.0001，●＝逆転項目，項目＝削除された項目

Ⅰ	●私は，欲しい物を手に入れるのに時間がかかり過ぎるのならば，そのものに興味を失ってしまう方だ。	0.55***
	人は，自分にとって意味あるものを得たいときには喜んで待つべきである。	0.36***
	普通人間はお互いに正直に，かつ誠実に関わり合っているものだ。	0.03
	一般的に，人間は信頼できるものだ。	0.39***
	●本当に信頼のおける人はなかなかいないものだ。	0.53***
	私の人生の最良の時は，これから訪れるであろう。	0.53***
	●将来うまくいくかどうかを考えると，今まで絶好のチャンスを逃してしまってきたように思う。	0.56***
	●本当の幸せや成功につながるようなチャンスを逃してきたような気がする。	0.55***
	最終的に職業を決定したら，きっとうまく人生を乗り越えられるであろう。	-0.04
Ⅱ	いったん決断したことについてくよくよ考えたりしない。	0.55***
	私がこれまで下した判断あり決断は，だいたいにおいて正しかった。	0.55***
	私くらいの年になれば，両親が反対しても，自分のことは自分で決断しなければならない。	0.50***
	自分の人生なのだから大事なことは人に頼らないで，自分で決断を下していると思う。	0.55***
	大体の場合，自分が決断した以上は，あとで悔やむことをしない。	0.63***
	自分が他の人のようにうまくやれないということを人に悟られても，それほど気にはならない。	0.08
Ⅲ	●人と知り合う時，その人があなたの生い立ちや家族について，あまり知らない方が，親しくなりやすい。	0.48***
	私は家族に誇りを感じている。	0.53***
	●青年が悪戦苦闘して克服していることの1つは，自分の家族との関係や，自らの育ちに関することである。	0.48***
	●私は，これまで，学校のクラブ活動や生徒会活動に進んで参加する方ではなかった。	0.41***
	●ここ2～3年間，私はクラブやグループ活動にはほとんど参加していない。	0.58***
	10代の少年少女時代の楽しい出来事の一つは，仲間たちと一緒に規則や約束を決め，協同して何かをやることである。	0.38***
	何か課題をやる場合には，全体の見通しを失わないためにも，その場その場のことだけに絞られないようにやっていく。	0.38***
	●私はいつもあくせくしているが，どんなに一生懸命やっても，他の人ほどには成果があがらないように思われる。	0.52***
	現在，いかにたくさんの仕事に追われているとしても，次にやらなければならないことについて何らかの計画をもっていることはいいことである。	0.56***
Ⅳ	●働くということは，人間が生きていくために我慢しなければならない必要悪である。	0.11
	私の仕事の出来栄えが，人のものと比較される時でも，私は最大の能力を発揮することができる。	0.48***
	●何か仕事に着手するときに，やらずにすみそうなことは，ことごとく回避する。	0.43***
	●通常，勉強（仕事）しなければならない時には，それがいかなるものであれうんざりしてしまう。	0.56***
	●スポーツや試合など，いつも人と競争したり勝つことを要請されるようなものは，好きになれない。	0.48***
	私は，人と張り合ったり競争する場面で，仕事やスポーツをするとき，特にそれが苦にならないし気楽に楽しむことができる。	0.41***
	私は難しいことがらに挑んでいくのが好きである。というのは，それを成し遂げることによって，大きな喜びが得られるからである。	0.34***
	もし必要ならば，1つのことに注意を集中するのも難しいことではない。	0.49***
	●私は1つのことに集中することができない方だ。	0.51***
	●たとえ努力はしてみても，1つの事に専念することは私にとって随分骨の折れることである。	0.51***
	自分が関ったりやっていることに気を散らすことなく専念することはさほど難しいことではない。	0.53***
Ⅴ	●だれも私のことを理解してくれないように思う。	0.51***
	●うまく課題をやりとげた時でさえ，他の人は私のやったことを理解したり，是認をしたりしてくれないように思える。	0.55***
	●これまで，私の仲間は私の能力に対して正当な評価や理解を示してくれなかった。	0.58***

	●私は，人生において本当に何をしたいのか決めることができない。	0.53***
	●私のやり方は，他人に誤解を受けることが多い。	0.58***
	●もし，自分の容姿がもっとよければ，もっとよい人生が送れるだろうに。	0.52***
	●私は，将来のはっきりした目標や計画がない。偉い人の判断に従っていけば無難である。	0.54***
	将来自分が何をしたいか確信を持っており，あるはっきりした目標をもっている。	0.50***
VI	私は，とても話しやすい人間のようだし，自分でもそう思う。	0.35***
	●たとえ好意の持てる人であっても，共に活動してきた人を本当に知ることはなかったように思う。	0.46***
	私はコンパやパーティで，他の人をなごませたり，楽しませたりする社交性があると思う。	0.45***
	●自分の感覚ではよくないと思うことを，周りの仲間がやっている時に，ことわりきれないところがある。	0.04
	わずらわしい人との交際はうまく避けていける。	0.40***
	●人との集まりで，他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと，自分の意見をはっきりと主張するのにためらいを覚える。	0.53***
	私には，腹を割って話し合えるような親友が一人くらいはいる。	0.43***
	集団内で，私はちゅうちょすることなく，自ら正しいと思うことをはっきり表明できる。	0.55***
	敵対する人がいる方が，親友が誰もいないことよりまだましである。	0.01
	●私は，時には強く感情が揺れ動かされることもあるが，人前では，決してそれを悟られないようにする。	0.44***

表４－２　REIS の要約統計量

要約統計量					
下位尺度（項目数）	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
I (7)	309	34.43	5.69	21	49
II(6)	325	29.71	4.82	12	41
III(9)	314	45.94	7.05	23	62
IV(10)	304	47.34	7.20	21	66
V(8)	319	39.26	6.69	15	55
VI(8)	304	39.33	5.50	20	53
REIS 全体 (48)	220	239.19	27.81	137	306

表４－３　REIS の下位尺度・全体得点との相関係数

	I	II	III	IV	V	VI	REIS 全体
I	—						
II	0.37	—					
	<.0001						
III	0.55	0.39	—				
	<.0001	<.0001					
IV	0.50	0.48	0.57	—			
	<.0001	<.0001	<.0001				
V	0.49	0.31	0.50	0.51	—		
	<.0001	<.0001	<.0001	<.0001			
VI	0.46	0.40	0.49	0.42	0.44	—	
	<.0001	<.0001	<.0001	<.0001	<.0001		
REIS 全体	0.76	0.59	0.80	0.80	0.78	0.71	—
	<.0001	<.0001	<.0001	<.0001	<.0001	<.0001	

信頼性の検討

先行研究では，Rasmussen(1961)の場合，信頼性は２つのサンプルの各々について，折半法により.84と.85である。本研究では，REIS の48項目ならびに下位尺度毎の Cronbach による信頼性係数は，全体得点では.83，第Ⅰは.51，第Ⅱは.54，第Ⅲは.61，第Ⅳは.63，第Ⅴは.63，第Ⅵは.46である。（表４－４）下位尺度毎に見ると，第Ⅵの値のようにそれほど高いと言えないものもあるが，全般的には，.61～.63の数値が多く見られ，信頼性は低くないと言えよう。48項目全体では，α係数は.83の値を示しており，この観点からの信頼性は高いと言えよう。

以上の分析から，REIS は，内的整合性の観点から高い信頼性を持っていると言えよう。

表４－４　REIS のα係数による信頼性係数(N=220)

下位尺度	I (7)	II (6)	III (9)	IV (10)	V (8)	VI (8)	全体 (48)
α係数	0.51	0.54	0.61	0.63	0.63	0.46	0.83

妥当性の検討

先行研究において，自我同一性は，不安と有意な負の相関(例えば，Howard & Kubis, 1964; 田端, 1981; 宮下, 1987)，自尊感情と正の有意な相関(Rasmussen, 1964; 宮下, 1987)があることが知られている。本研究では，REIS の併存的妥当性と基準関連妥当性を３つの尺度との関係によって確認した。

まず，アイデンティティ尺度との関係を分析することにより，REIS の併存的妥当性の検討を行った。表４－５に REIS とアイデンティティ尺度の下位尺度ならびに全体得点との積率相関係数を算出し，有意水準

と共に示した。

アイデンティティ基礎とREISの下位尺度との相関は，第Ⅲの自主性を除いて，全ての段階で有意な正の相関が得られている。その値は，.31～.40である。REISの全体得点との相関は.47の有意な正の相関が得られている。

アイデンティティ確立とREISの下位尺度との相関は，全ての段階で有意な正の相関が得られている。その値は，.36～.46である。REISの全体得点との相関は.57の有意な正の相関が得られている。これを見ると，REISとアイデンティティ尺度の下位尺度ならびに全体との相関について，各段階内において，アイデンティティ基礎よりアイデンティティ確立の方が高くなっている。このことから，各発達段階の心理的危機は，いずれもアイデンティティの基礎から確立の方向へ向かって解決されていることが認められた。両尺度間の全体の相関係数は，.60の正の有意な相関が得られた。上記の分析から，アイデンティティ基礎尺度では，REISの第Ⅲ段階で有意な相関が認められなかったが，それ以外ではいずれも有意な高い値を示しており，アイデンティティ尺度との関係において，REISの妥当性は高いと言えよう。

なお，アイデンティティ尺度全体得点とREISの下位尺度では，第Ⅰは.45，第Ⅱは.41，第Ⅲは.36，第Ⅳは.50，第Ⅴは.49，第Ⅵは.45と有意な正の相関が得られている。

次に，2点からREISの基準関連妥当性の検討を行った。

これまで行われてきた種々の研究から，自我同一性は不安(顕在不安など)と負の有意な関係があることが知られている。(例えば，Howard&Kubis，1964; 田端，1981，宮下，1987など)。本研究では，清水・今栄(1981)が作成したSpielbergerの状態・特性不安検査(State － Trait Anxiety Inventory: STAI)の日本語版のうち，特性不安(A-Trait)をとりあげ，REISとの関係を分析した。その結果を示したものが表4－6である。

表4－5　REIS-アイデンティティ尺度間相関係数(N=348)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	全体
ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ基礎	.31<.001	.36<.001	.21 n.s	.38<.001	.40<.001	.33<.001	.47<.001
ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ確率	.46<.001	.37<.001	.36<.001	.46<.001	.42<.001	.40<.001	.57<.001
全体	.45<.001	.41<.001	.36<.001	.50<.001	.49<.001	.45<.001	.60<.001

表4－6　REIS-特性不安(A-Trait)尺度間相関係数(N=348)

下位尺度	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	全体
r	−.38<.001	−.38<.001	−.33<.001	−.44<.001	−.42<.001	−.35<.001	−.50<.001

る。REISの下位尺度ごと全体に見れば，－.33～－.44の有意な負の相関が認められた。REISの全体得点では，－.50の有意な負の相関が得られた。先行研究(宮下，1987)と違い，その数値はやや高く，いずれも有意な負の相関が認められた。

以上の分析から，REISの全ての下位尺度においていずれも有意な値が得られ，不安尺度との関係において，REISの妥当性は高いことが示されたと言えよう。

次に，REISと自尊感情(self-esteem)との関係について検討した。これまでの研究において，自我同一性と自尊感情(ないし自己受容)とは，有意な正の相関があることが見出されている。(Rasmussen，1964；宮下，1987；)表4－7にREISならびに下位尺度と自尊感情尺度間のPearsonの積率相関係数を算出して示した。これによると，その値は，下位尺度では，.35～.43で，全てにおいて正の有意な相関が得られた。REISの全体得点では，0.53の値を示した。このことから考えて，REISは十分妥当な尺度と考えられる。

以上，併存的妥当性ならびに基準関連妥当性の観点から，REISの妥当性について検討した。いずれの分析においても，REISは，十分妥当な尺度であることが示されたと言える。

表4－7　REIS-自尊感情尺度間相関係数(N=348)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	全体
r	.43<.001	.35<.001	.36<.001	.40<.001	.41<.001	.41<.001	.53<.001

5．研究上の意義と今後の課題

本研究では，発達的側面に着目して，自我同一性の尺度を作成することに意義があった。すなわち，このように自我同一性尺度を作成したことによって，発達的側面に着目し，詳細に検討することが可能となり，効果的な介入を考える上で非常に重要な示唆が得られると考えられる。また，モンゴルにおいて同一性の確立に及ぼす様々な要因の影響を考慮する必要があり，今後，実証的研究を積み重ねる必要がある。本研究において作成した尺度はこのような研究にも役立つこと

が期待される。

今後の課題として，質的な研究方法によるデータの収集を行い，モンゴル人の青年の個々の自我同一性の状態を明らかにすることが望まれる。

引用文献

小此木啓吾訳編　エリク・H. エリクソン著　1982　自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル　誠信書房

Enright, R. D.,Lapsley, D. K., Cullen, J.,& Lallensack, M. 1983 A psychometric examination of Rasmussen's Ego Identity Scale. *International Journal of Behavioral Development, 6, 83-103*

Rasmussen, J. E. 1961 An experimental approach to the concept of ego identity as related to character disorder. *Dissertation Abstracts*, 22(5-A),(American University, Dissertation, 1961)

Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. Psychological Reports, 15, 815-825.

Erikson, E. N. 1982 The life cycle completed: *A review. New York, W. W. Norton*

宮下一博・平野　1981　Rasmussen の自我同一性尺度の検討（Ⅰ）（Ⅱ）中国四国心理学会論文集，14，48-49.

宮下一博　1987　Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討　教育心理学研究　第35(3)，64-69.

下山晴彦編　1998　教育心理学 II　発達と臨床援助の心理学　東京大学出版会

下山晴彦　1992　大学生のモラトリアムの下位分類の研究　教育心理学研究40(2)，1-9.

松原治郎　1980　管理社会と青年　大原健士郎・岡堂哲雄編　講座異常心理学 3　思春期・青年期の異常心理　新曜社

清水秀美・今栄国晴　1981　STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY 日本語版(大学生用)の作成　教育心理学研究，29，348-353.

教育文化科学省　2003　教育，文化，芸術，科学分野における統計(2002～2003年)　モンゴル韓国技術大学出版会ウランバートル市

モンゴルの青年同盟所属ポリシーセンター　2003　モンゴル青年の発展・需要基礎調査　ポリシーセンターウランバートル市

鑪幹八郎編　1997　アイデンティティ研究の展望Ⅳ　ナカニシヤ出版

鑪幹八郎編　2002　アイデンティティとライフサイクル論　ナカニシヤ出版